

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終 圧えつけていた。焦躁と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつてしまいたくなる。何か私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と言つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希わくはここがいつの間にかその市になっているのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかつた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを樂しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様を持つ

た花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火と
いうのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私
の心を唆った。

それからまた、びいどろという色 硝子で鯛や花を打ち出してあるお
はじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗めてみ
るのが私にとってなんともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味
ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては
父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落ち魄
れた私に蘇えってくる故だろうか、まったくあの味には幽かな爽やかな
なんとなく詩美と言ったような味覚が漂って来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは言えそんなもの
を見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢という
ことが必要であった。二銭や三銭のもの——と言って贅沢なもの。美し
いもの——と言って無気力な私の触角にむしる媚びて来るもの。——そ
う言ったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、たとえば
丸善であった。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工
や典雅な口ココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、
小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあっ
た。そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。
しかしここももうその頃の私にとっては重くするに過ぎなかつ
た。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には
見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下
宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまったあと
の空虚な空気のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまたそこから
彷徨い出なければならなかつた。何か私を追いたてる。そして街から
街へ、先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まっ
たり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ
寺町を下り、その果物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を
紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店で
あった。そこは決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美し
さが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べて
あって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。

何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したという
ゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんな
ヴォリュームに凝り固まったというふうにも果物は並んでいる。青物もやは
り奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。——実際あそこの人参菓の
美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だと
か。

またその家の美しいのは夜だった。寺町通はいつたいに賑かな通り
で——と言って感じは東京や大阪よりはずつと澄んでいるが——飾窓の
光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭
の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街
角になっているので、暗いのは当然であつたが、その隣家が寺町通にあ
る家にもかかわらず暗かつたのが瞭然しない。しかしその家が暗くな
かつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つ
はその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠った帽子の廂のよ
うに——これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をや
けに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なのだ。
そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように

浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままに
も美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をき
りきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立って、また近所にある鎔屋の二
階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を
興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍
しい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店とい
うのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつ
たので、それまであまり見かけたことはなかつた。いったい私はあの檸
檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたよう
なああの単純な色も、それからあの丈の詰まつた紡錘形の恰好も。——結
局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩い
たのだらう。私は長い間街を歩いてきた。始終私の心を圧えつけていた
不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んで来たともえて、私は街
の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの
一類で紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであつ
た。それにしても心というやつはなんとという不可思議なやつだらう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達に誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かった。その熱い故だったのだろう、握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持っていては嗅いでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上って来る。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸い込めば、ついで胸一杯に呼吸したことになかった私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇って来てなんだか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと言いたくなかったほど私にしっくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮かべては歩いてきた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

——つまりはこの重さなんだな。——
その重さこそ常づね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり——なにがさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は二つ入ってみてやろう」そして私はずかずか入って行った。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が必要な！と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐってゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して

来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつてそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本までなおいつその堪えがたさのために置いてしまった。——なんという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終わつて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わっていたものであつた。

……

「あ、そつだそつだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そつだ」私にまた先ほどの軽やかな昂奮が歸つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなつたり青くなつたりした。

やつとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる、心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だつた。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえつていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こつた。その奇妙なくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、なに喰わぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行こうかなあ。そつだ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

この文は、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られたデータを利用していただいています。注意書き・ルビ等は電本座の編集上の都合により省略したり、変更しているものもあります。底本・注意書き・データ入力・校正など詳細を必要とされる方は、青空文庫をご覧ください。